昭和の勤労青年と「まなざし」の快楽

佐藤卓己『青年の主張 まなざしのメディア史』（河出ブックス）を読む

日高勝之

一　はじめに

『ＮＨＫ青年の主張』は、昭和のＮＨＫを代表する国民的テレビ番組の一つである。平成三十年を迎え、来年は新しい年号に変わり、昭和は二つ前の年号になろうとしている昨今では、この番組が話題に上る機会も少なく、やや忘れられつつある感が無きにしも非ずであろう。だが、毎年、「成人の日」に放送された『ＮＨＫ青年の主張』は、同じＮＨＫホールから中継される大晦日の『ＮＨＫ紅白歌合戦』と共に、戦後昭和の年末年始をいろどる、重要な放送番組であった。そして後述するように、『ＮＨＫ紅白歌合戦』と異なり、『ＮＨＫ青年の主張』は、視聴率を度外視しても、ＮＨＫが重視した／できた／する必要があった番組であったことが想い起こされるのである。

著者・佐藤卓己氏による『青年の主張 まなざしのメディア史』（河出ブックス）について論じる前に、まずは、本書が過去の無数にある番組の中の「ワン・オブ・ゼム」ではなく、放送の歴史において重要度の高い番組を取り扱った書物であることを確認しておき

たい。

二　本書の構成

まず、本書の構成を簡潔に紹介しておこう。序章「《青年の主張》の集合的記憶」では、執筆動機や背景、研究の目的が示されたのち、各章で時代ごとの《青年の主張》の内容と影響のありよう、周辺事情などが詳細に検証されていく。第一章「ラジオから響く『小さな幸せ』　一九五〇年代」では、戦後復興期の、まだ《青年の主張》がラジオで放送されていた一九五〇年代が検証される。第二章「ブラウン管に映る弁論大会　一九六〇年代」では、テレビでの放送に移行し、「青年の主張型」ともいうべきステレオタイプが生まれた（一〇七頁）と著者が言う、経済成長期の一九六〇年代が検証される。第三章『らしさ』の揺らぎと再構築　一九七〇年代」では、《青年の主張》の「らしさ」が揺らぎ始めると共に再構築が成されたと著者がいうテレビ黄金期の一九七〇年代について検証される。第四章「笑いの時代の『正しさ』　一九八〇年代」では、お笑いのネタになったようなかつての《青年の主張》タイプの出場者がもはや存在しなくなる、一億総中流時代の一九八〇年代について検証される。第五章「《青年の主張》のレガシー　一九九〇年代以降」では、後継の《青春メッセージ》へと番組改編後の一九九〇年代以降が検証される。最後の「おわりに《青年の主張》の未来へ」では、それまでの各章の議論が整理され、本書の全体が総括される。

三　資料の膨大さ

本書でまず目を引くのは、各章での《青年の主張》の時代を追っての検証の詳細さである。各年ごとに審査員、出場者、入賞者の経歴、スピーチの内容、関連の行事や放送番組についてなど、調査で分かりえた膨大な資料からの情報を適宜取捨選択するというより、

出来る限り詳細に記録がなされている。その結果、四二〇頁に及ぶ大著になっている。

こうしたことは外形的な事柄ではあるものの、無視できない重要性があると思われる。著者・佐藤卓己氏の数多い著作群の中では、私は『キングの時代 国民大衆雑誌の公共性』（岩波書店）をまず想起させられた。『キングの時代』の場合も、時代ごとの膨大な資料が読者に示された、五〇〇頁近い大著であった。両書に共通しているのは、膨大な資料の発掘を試みていることとそこで知りえた情報から例を一部だけ抽出して、導き出される著者の推論や分析結果の記述に依存するのでなく、膨大な資料をそれ自体価値あるものとして惜しみなく提示することで、無数の事実性そのものが尊重される。そうした情報の多さと長さによって、《青年の主張》のみならず、《青年の主張》という一つの番組・イベントに留まらない媒体周辺の諸事情、周辺環境、時代の特質が生き生きと浮かび上がってくる。そのことは同時に、読者が行間からいろいろな情報を読み取り、それぞれの像を結びつけたり、解釈する可能性を広げることに貢献することになる。

そういう意味で、読者にとっては、とても「親切な」書物かもしれないが、一方で資料や情報を収集した著者の労力は大変なものであったに違いない。実際、著者は、「一九八〇年代以前の音声や映像はＮＨＫアーカイブスにもほとんど保存されていない。放送台本や刊行資料も番組終了とともに処分されており、資料的困難は確かに大きい」としたうえで、関連データの照合も「困難を極めた」（一四頁）と述べている。放送というメディアは、新聞や雑誌に比して記録性が著しく弱く、ましてや《青年の主張》のような一九五〇年代から八〇年代にかけての昭和期の番組は、アーカイブス的な記録の発想がほとんどなかったため、放送されるとたとえ多くのオーディエンスを獲得しても、バブルのようにその場で消えていく宿命を背負っていた。そうした困難な事情がありながらも、著者が中断を挟んで「八年がかり」で執筆したのは、

《青年の主張》が戦後の昭和を彩る重要度の高い番組であることはむろんのこと、それに留まらない著者の問題意識があったからに違いない。

四　本書の問題意識～大人の「まなざし」とパブリックスピーチの系譜～

序章から伺えるのは、著者には大別して二つの、いずれも極めて興味深い執筆動機があることである。一つには、大人からの若者に向けられた教育的なまなざしへの一種の違和感である。冒頭で著者は、小学生だった著者・少年Tは、一九七〇年前後の《青年の主張》を家族とお茶の間で見ていた時に、「居心地の悪さ」を感じ、それは『教育のまなざし』を背中に受けているような感じ」（七頁）だったと述べる。興味深いのは、著者は自分の少年時代に体験した《青年の主張》の居心地の悪さを、現代の「主張する学生団体」SEALDs（自由と民主主義のための学生緊急行動）などの若者に向けられた大人やジャーナリストたちのまなざしと重ね合わせるのである。著者は、「時代を変えるのは若者の力だ」と唱える二〇〇九年一月の『朝日新聞』の社説を例に挙げ、リーマン・ショック後の世界的な経済危機の時代に、「若者への過剰な期待を語る書き手はいったい何者なのか」（一八頁）と問いかけるのである。加えて、著者は、昭和への懐古的な風潮がある昨今、《青年の主張》もやがて「明るい昭和」を示す番組として一方的に解釈され、集合的記憶として定着する可能性にも懸念を示している（二二頁）。

二つ目の著者の問題意識は、《青年の主張》をパブリックスピーチの昭和史の中で位置づけようとすることである。著者は、ＮＨＫ放送総局長が国会答弁で《青年の主張》を「一種の雄弁大会」と述べたことなどを例に挙げながら、このイベントを近代日本弁論史の中に位置づけることも可能だと述べる（二九頁）。そして、読者文化における知識人と大衆の乖離が「岩

波文化VS講談社文化」の枠組みで語られてきたように、弁論文化にも、教養主義と修養主義の二類型に分類できると述べ、戦後、前者は反体制的な学生運動文化にも引き継がれたが、後者の受け皿が《青年の主張》だったとして（二九頁）、このイベント・番組に注目するのである。そして、《青年の主張》の系譜を戦前に探ると、日本放送協会が一九三四年から放送されたラジオ番組《全国青年ラヂオ雄弁大会》に行きあたると述べる（三一頁）。

そして、それら戦前の弁論における「各自自独の率直にして堅実なる雄弁」さは、国民ひとり一人が語るべき必要さを持ったものとして、総力戦体制期に、総力戦を勝ち抜くために求められていたものだと述べている（三五頁）。著者は、「全国青年ラヂオ雄弁大会」、「全国青年雄弁選手権大会」（大日本雄弁会講談社）のいずれにおいても、《青年の主張》と同様に、「貧困」「農村」「学歴」「職業差別」などが語られれるが、「主張」があるだけで「討議」「議論」がなかったと指摘する（三六頁）。これらを背景に、著者は、戦前から勤労青年の弁論文化は存在してきたとし、戦後昭和の長い時代をカバーした放送番組・イベントとしての《青年の主張》に注目するのである。

こうした視点は、『キングの時代』ほかの著者の著作の多くに見られる戦前と戦後をつなぐ共通した問題意識を感じさせる。そして、戦前の雄弁大会から現代のSEALDsに至るまでを相同的なものとしつつ、近代日本の若者の弁論史の系譜とそれらに向けられた大人からのまなざしの歴史という巨視的な視点から考えることの意義に読者は気づかされることになる。

五　集団就職世代と全共闘世代

各章での著者の分析、とりわけ「政治の季節」を扱った一九六〇年代を論じた第二章では、《青年の主張》を核としながら、人生雑誌『若い広場』、『人生手帖』『葦』、及び全共闘運動などとそれぞれの距離が検

討され、当時の多様な若者の中での《青年の主張》出場者と他の媒体の立ち位置の相違が具体的に浮かび上がり、とても興味深く思われた。

著者は、《青年の主張》の合計五回分の全国大会スピーチのほぼ全文を掲載した人生雑誌『若い広場』に特に注目している。とりわけ第一四回全国大会（一九六七年度）をめぐって、『若い広場』で展開された論争は興味深い。もともと著者によれば、『若い広場』は《青年の主張》の「翼賛的メディア」であったのだが、この大会では『若い広場』の「変質」が示されたと述べるのである（一六二頁）。『若い広場』の一九六八年四月号では、匿名ではあるものの編集部員が書いたとされる《青年の主張》批判文が掲載された。それ以降、それへの批判に対する反論、再反論が繰り返し掲載されたが、それらの中で、入賞者は「おとな達の気に入る話をし、おとな達の顔色をうかがって動き回る」、「猿回しの猿」、「青年の主張が優等生タイプの人を選んで若者の模範としようとした」、それゆえに「青年の主張をぶちこわそうと思った」等々の激しい言葉が綴られる（一六三～一六六頁）。

一方、「日本共産党系」と目されていた人生雑誌『人生手帖』は、一九六〇年代後半に、《青年の主張》に強い対抗意識を抱いていたことが紙面から読み取れると著者は述べる（一七五頁）。『人生手帖』は、「社会の下積みの青年の声」を取り上げる意義を訴えていた点でもとより《青年の主張》との共通性があったが、一九七一年二月号の「編集後記」では、「どちらが内容としてすぐれているかは見る人によって違うでしょうが、ＮＨＫの方にないものがこちらにはあるはずです。できたら両者を比較してみてください」と記していることに著者は注目する。そして、『人生手帖』にあって「ＮＨＫの方にないもの」として、部落差別を扱ったもの、新興宗教関連のもの、特定政党への批判、在日朝鮮人関連のもの、風俗流行に関するもの、性的問題を扱ったもの、高齢者による主張などを著者は挙げている（一七六頁）。

こうして《青年の主張》を考察の軸に据えながら、著者は、《青年の主張》そのものと『若い広場』『人生手帖』など、当時の勤労青年文化の特質とそれぞれの性格を浮かび上がらせていくのだが、興味深いのはそれを通してそれぞれの政治的立場の微妙な相違も同時に可視化できることである。その結果、とかく「全共闘世代」として括られ、「全共闘世代」の一九六〇年代として語られる当時がいささか異なる相貌で立ち現れてくることになる。いうなれば、《青年の主張》を磁場にした勤労青年が主役のメディアイベントとそれを意識した周辺文化が、全共闘的な学生運動への対抗文化として機能していたであろうことが、その内実と共に浮かび上がってくるのである。

著者は、「全共闘世代」あるいは「団塊の世代」と呼ばれる人々の、主にマスメディアで語られる際のステレオタイプの多くは虚像だと指摘する（一七〇頁）。そして、当時の世代の八割以上が大学に進学しなかったこと、学園紛争が激化したのは知名度のある都市部のマンモス大学のみであったことなどから、そもそも「団塊の世代」八百万人の中で全共闘体験を持っていたのは、同世代人口のごく一部に過ぎないと問題化する（一七〇頁）。数において同世代人口の圧倒的多数を代表したのは、「学生の異議申し立て」よりも「青年の主張」の方であったと述べるのである（一七〇頁）。以下の著者の言葉は、本書の執筆動機を端的に物語ると同時に、本書の存在意義を説得的に示してくれるだろう。

全共闘世代とは、同時になお集団就職世代なのである。（中略）にもかかわらず、汗牛充棟たる全共闘運動研究に対して、《青年の主張》研究は見あたらない。このイベントの出場者が「良識ある青年」として選抜され、社会秩序を支える中堅となったからである。メディアも研究者も同世代ピラミッドのトップとボトム、つまり「有名大学の暴力学生」と「社会問題としての非行少年」は社会

病理として注目するが、こうした健全なミディウムに目を向けることは少ない（一七〇頁）。

著者のこうした問題意識は、とても重要に思われる。昨今、とりわけ二一世紀の到来以来、一九六〇年代前後の時代を批判的に総括する動向がアカデミズムとジャーナリズムで顕著にみられる。その際、当時を「一九六八年」を核とした全共闘運動に代表される「政治の季節」のありように注目することが多い。その一方で、同時代の一九六〇年代前後は、昭和三三年頃を舞台にした映画『Always 三丁目の夕日』（二〇〇五年）のヒット以降、「昭和三〇年代ブーム」「昭和三〇年代ノスタルジー」として主にメディアで盛んに取り上げられることで、「昭和ノスタルジア」は社会現象化していった。

「昭和三〇年代ブーム」として処理される当時は、主に高度経済成長期の「光」に過剰なほどのスポットライトがあてられる。一方で「政治の季節」として争点化される当時は、そうした高度経済成長期の「影」が過剰に語られることになる。こうした両極ともいえる「光」と「影」の間にあって、高度成長期のエリートでも、学生運動の担い手でもなかった勤労青年たちは、当時の世代のマジョリティを形成した人々であったはずなのに、メディアと研究の両方で、これまで決して十分に取り上げられたり、語られたりすることがなかったのである。そういう意味で本書は、ある一つの、（これもまた忘れられかけようとしている）メディア作品の検証を通して、勤労青年というアクターとその周辺に着目し、戦後昭和の青年文化の複雑なありようを構造的に可視化させることに成功している。それが本書の何よりの貢献であろう。

六　大人の「まなざし」と若者のアイデンティティ闘争

もう一つ、興味深いのは、本書の副題が「まなざし

のメディア史」となっているように、本書は、審査委員＝大人のまなざしを前にしての若者たちのアイデンティティ闘争の多様な軌跡として読み取ることが可能な点である。《青年の主張》は、たしかに勤労青年の若者の夢と希望が語られるのが定番であった。そのため、集団就職者、勤労学生、定時制高校生、農業従事者、公務員、警察官、消防士、炭坑仕操工、理学療法士、養豚業、農協職員、幼稚園教諭等々、多彩な仕事の若者が登場する。だが実際はそれに留まらず多様な立場の若者が応募していた。本書によると、例えば、第一一回大会（一九六四年度）の応募者の内訳では、定時制を含めた学生が四二・八％と半分近い数を占めていた。これにはむろん大学生も含まれていた。そのため、イベントのコアイメージからやや外れるようなタイプの出場者も少なくなかった。とりわけ、一九七〇年代以降、勤労青年に限らず一般の若者の参加者が目立つなど、《青年の主張》が少しずつ変容していくことを本書は細かに示していく。

それらを通しても、著者は全共闘運動と《青年の主張》が青年文化の座標軸上の対抗関係にあったことを浮かび上がらせる。中でも興味深いのは、猪口邦子をめぐるエピソードである。上智大学教授を経て、日本政府特命全権大使としてジュネーブ軍縮会議議長をつとめ、その後、国会議員としても活躍する猪口邦子（当時は横田邦子）は、上智大学外国語学部在学中の一九歳の時、第一八回大会（一九七一年度）に出場し、全国大会で優勝した。東京の大学生が優勝したのは初のことであった。しかも猪口は帰国子女であり、「私の海外体験」と題したスピーチでは、「わたしの体験が役立つならば、喜んでそのかけ橋の一端をになうつもりです」と語られることで、それまでの、「決意」が示される定番スタイルから、「新しい自己肯定のスタイル」が示された点で、《青年の主張》というメディア・イヴェントのターニング・ポイントとなったと著者は述べている（二〇〇頁）。

著者は、知的な海外体験を軽やかに語る女子大生・

猪口のスピーチに、学園紛争時代に「お行儀のいい優等生」を描いた庄司薫『赤頭巾ちゃん気をつけて』（一九六七年）の主人公「薫くん」を思い浮かべたと述べ、勤労青年文化VS全共闘運動の対抗関係以外に、自己と社会を肯定するノンポリ・エリート学生VS全共闘運動の対抗関係をも、《青年の主張》という磁場に見出していく。猪口が優勝した第一八回大会が開催された一九七二年という年に、凄惨なリンチ殺人が繰り返された、学生運動の極北ともいえる「連合赤軍事件」が起きたのは、じつに象徴的である。

なお、本書では、著者がわざわざ、参議院会館に猪口邦子議員を訪ねていく様子が描かれている。そこで著者は、自分にとっての《青年の主張》の意味を尋ね、猪口の口から、忘れがたい印象的な言葉を引き出している。

選挙民は、青年の主張の優勝者であるということに、私が特命全権大使であったことや大学教授であったことより、猛烈な共感と関心を寄せた。万人に開かれた扉とその狭い門を通るという、民主主義との相似を直感しているかのような共感だった（二〇二頁）。

それにしても、無数の勤労青年に加えて、なぜ猪口も含め、少なからぬエリート学生が《青年の主張》に応募したのだろうか。本書の副題は「まなざしのメディア史」であるが、ここでも「まなざし」がヒントになっているように思われる。実際、著者は、一九七三年に出版された見田宗介の『まなざしの地獄』を引き合いに、集団就職で上京した後、一九六八年に連続ピストル射殺事件を引き起こした永山則夫について触れ、永山にとっての「まなざしの地獄」が、一方では、《青年の主張》出場者にとっての「まなざしの快楽」でもありえた点で、立ち位置の違いはあれど、互いに大人たちの「まなざし」の重要性があったことを述べている（二一二頁）。

ここで考えられるのは、勤労青年もノンポリ・エリート学生にとっても、何がしかの自己実現に向けての「野心」と、その達成のための大人たちの「まなざし」による評価・点数付けの間に、一種の「共犯」関係が見られたであろうことである。本書と同時期に刊行された福間良明著『「働く青年」と教養の戦後史―「人生雑誌」と読者のゆくえ』（筑摩書房）でも述べられているが、当時の人生雑誌では、そこでの「査読」システムが応募者の優越感を喚起していた。したがって、人生雑誌も《青年の主張》も共に、「査読」的なシステムに支えられた媒体の「まなざし」の中での評価というものが、ポジショナリティを超えて当時の若者が応募した背景にあったと考えられる。そこに共通するのは、反社会的、反体制的な運動論でなく、あくまでも自己と社会を肯定することを前提にしての一種の「野心」とその向こう側にある自己成就への強い希望と期待感であろう。それが制度的な大人たちの「まなざし」による評価・点数付けであった点で、昨今のソーシャル・メディアで顕著な「承認」とはいささか異なる。

だとすれば、《青年の主張》や人生雑誌でかつて存在した「まなざし」の評価システムはもはや存在しないのだろうか。本書で繰り返し紹介され、指摘されている《青年の主張》出場者のステレオタイプ化された主張の「不自然さ」や「お行儀良さ」とそれらへの点数付けによる評価は、むしろ現代の大学などの学校における推薦入試、ＡＯ入試、あるいは企業への就職活動における志望理由書、面接などといくぶんの親和性を指摘することも出来るだろう。そういう意味では、《青年の主張》や当時の人生雑誌そのものは既に過去のものとなっているが、それらのＤＮＡは命脈を保っていると言えなくもない。そのことは、学校と社会の双方で、自己実現に向けて自己主張する側（若者）と評価する側（大人）の間で「パフォーマティブ」であること、仮想的に振る舞いあうことの相互合意の正当性の伝統、―それはとりもなおさず国家的な維持シス

テムと密接な関係があるのだが―、それが依然として生命力を持ち続けていることを意味する。本書を拝読しながら、そんなことも想い起こされた。

七　公共放送ＮＨＫの社会教育の編制のありよう

本書は、あくまでも戦後昭和の一つのイベント、放送番組に的を絞った書物であるが、読み方によっては、公共放送ＮＨＫとは何かを知り、考えるための最良のものの一つでもある。なぜならば、戦後の公共放送ＮＨＫにとって社会教育・啓蒙は重要度の高いものであり、本書は、そうした戦後の公共放送を媒体にした社会教育の編制の構図を巧みに可視化させることに成功しているからである。

《青年の主張》というイベント・放送は、「官製」色が濃厚なものであった。本書で引用されている、ＮＨＫ教育部による《青年の主張》企画に関する公式文書（一九五五年）で示されているように、「従来の雄弁的演説調を脱して新しい話し方を探求する。これもこの番組がねらう要素」であり、一義的には勤労青年の参加を目指しながらも、当時の日本の若者を広く糾合することが意識されていた（四三頁）。実際《青年の主張》には、勤労青年、農村青年、身体障害者から、上述した猪口邦子、海部俊樹、重信房子らのような多彩な学生らまでもが包括されることになった。こうした包括性、統合性は、受信料収入に支えられた戦後の公共放送ＮＨＫが理念として目指したものと軸を同じくするものであった。

その包括性、統合性のありようは、『明るい農村』のような別の番組とも相同性を認めることが出来る。それは、一義的には弱者、サバルタン的な立ち位置ではあるが決してマイノリティではない人々に焦点をあて、視聴者としての彼らからのまなざしを意識しつつ、同時に異なる立ち位置にいる（青年でない）大人・高齢者、（農村でない）都市住民、（身障者でない）健常者などのマジョリティの公共放送視聴者のま

なざしを意識した番組づくりである。そのような、国民に対する統合的なまなざしの意識は、商業主義に支えられた民放とはいささかことなるもので、『プロジェクトX 挑戦者たち』『バリバラ 障害者情報バラエティ』のような、やや毛色が異なるような二一世紀のNHKの番組群にもある程度、共通してみられるものである。

だが、そうした包括性、統合性は、社会問題に矛先を向け、その解決に切り込むよりも、個人の努力、奮闘を称えあうことに力点が置かれているため、一方では保守性が強いものでもあった。著者が《青年の主張》の発想は、「せいぜい『社会改良』的であっても、『社会革命』的ではない」（一二一頁）と述べるのもそうした事情がある。

そうしたことは、イベント・放送としての《青年の主張》の持続的な成功には、組織的な動員と協力の後押しがあった事情によっても説明できる。本書では、警察、消防署、農協青年組織、企業などが若手職員、社員の社会教育のために《青年の主張》を活用したことが紹介されている。中でも興味深いのは、東京三洋電機が東北から集団就職した女子社員に対する「社会教育」のためにこのイベントを活用していたエピソードである。この企業の「生活指導」担当者は、「執拗なまでに生活文を綴らせる教育に徹してきた」理由について、「少女たちの過去の生活にまつわりついて離れなかったところの進学できない劣等感・差別感・無力感情を自らの力で除去してゆけるような関係・場を設定してやらねばと考えたから」と説明している（一四一頁）。

個人的な話になるが、私は研究者に人生進路を変更する前の二〇代、三〇代は、NHK職員（報道局ディレクター、番組デスク）として一五年間、公共放送の仕事に携わった。そうした私が見聞きする限りでも、当時のNHKは学校他各種の組織、団体に、所属する学生や従業員に作文させるよう依頼したことも普通にあったようだ。したがって、イベント・放送と個人の

直接的な関係に留まらず、学校、企業、各種団体の積極的な関与が目指された一種の「運動」の側面も少なからずあったと考えられよう。そうであるがゆえに、《青年の主張》とその周辺媒体が社会改革＝全共闘運動のような運動との対抗関係を構築しうる社会改良＝保守・統合的な運動の核となっていたと言えるのである。そして、そうした「国民」の物語を想定した保守性、統合性は、二一世紀に入って人気を博した『プロジェクトX 挑戦者たち』のような番組にDNAが継承されていると見るのも穿った見方ではなかろう。『プロジェクトX 挑戦者たち』が、日本PTA全国協議会による「一番子供に見せたい番組アンケート」で四年連続で一位を獲得するなど、中高年から極めて高い支持を得たこともそうしたことを裏付けるだろう。

また、NHKは「公共性」の意義を国民の間で幅広く担保するために、日常的に「疑似メディアイベント」を再生産し続けたが（今も再生産しているが）、本書は、《青年の主張》がそうしたNHKによる「疑似メディアイベント」の典型的かつ象徴的なものであったことを丁寧に解き明かしてくれると共に、NHKがいかなるやり方で「疑似メディアイベント」の創出にコミットしてきたかを具体的に示してくれる。《青年の主張》放送日の夜に、『青年に期待する』『若い広場』が放送され、その後、『けさの話題』『あすは君たちのもの』他の番組で《青年の主張》出場者の活躍が紹介されるなど、くどいほどのイベント再利用が繰り返される様子が本書では描かれている。雑誌『若い広場』で《青年の主張》の原稿が転載されるのに加えて、『紅白歌合戦』で出場者が地方審査員として登場していたことなども細かく記される。興味深いのは、第一〇回（一九六三年度）全国大会で、「通信教育」推進を訴える主張が二つ並んだことに著者が注目していることである。じつは前年の一九六二年、NHKは通信制高校を経営する学校法人・日本放送協会学園（通称NHK学園）を設立しているが、著者は、こう

した事情と《青年の主張》での「通信教育」推進を訴える主張が並んだことを「どこまで意図的だったかは別にして」と述べながらも、きっちりと紹介している。ＮＨＫ番組の、こうした「疑似イベント的性格」は、世間でもある程度は薄々と想像されてきたものかもしれないが、具体的な検証はこれまでほとんど成されてこなかった。そういう点でも本書は貴重な記録である。

さらに興味深いのは、「疑似メディアイベント」に留まらない、《青年の主張》へのＮＨＫ自身の強いコミットメントが示され、イベント・放送の、いうなれば「創作的」側面、「検閲的」側面までも炙り出していることである。特に面白いのは、第四回（一九五七年）大会の予選審査の内幕を暴く証言についてである。これはＮＨＫ広島放送局の担当職員から優勝後に漏らされた「内緒話」だという。それによると、担当プロデューサーが読まずに屑籠に捨てた応募者の下書き原稿をたまたま夫人が読み、興味を持ったために夫に見せ、初めて読んだそのプロデューサーも興味を示して、「自ら清書して選考ファイルに戻した」とのことである（八六頁）。さらには、イベントの事前に示された発表原稿については、一切の変更を出場者に認めないことや、審査にはＮＨＫ幹部が加わったり、委員で話し合いをするなどの内部チェックのメカニズムまで細かく記されている（一五三頁）。

別の観点から本書が興味深いのは、戦後のＮＨＫの歴史の流れを考える上で、公共放送ＮＨＫが若者とどう向き合ってきたかの記録として読む材料を提供してくれることである。本書を通して（後継番組『青春メッセージ』を含めて）《青年の主張》の盛衰が描かれるが、とりわけ一九八〇年代以降、ＮＨＫが時代の移り変わりの中で番組コンセプトの変更や打ち出しに苦慮する様子が描写される。実際、ＮＨＫは、民放と比べて高齢者の視聴者獲得に長けているが、その反面、若者の視聴者獲得は歴史的に苦手としてきた。そのため、若者視聴者を獲得するために悪戦苦闘するのだ

が、『若い広場』の後継番組として土曜日の夜に放送された『ＹＯＵ』など一部の番組を除けば、必ずしも成功を収めたとは言いがたい。そうこうしているうちに、皮肉なことに二一世紀を迎えて少子高齢化の流れが明白になってくると、若者でなく、得意の高齢者を意識した番組重視に回帰していくのである。本書では、一九八〇年代以前が一〇年ごとに一章ずつ割かれているのに比べ、一九九〇年代以降は、第五章でまとめて短めに議論されているのは象徴的である。

八　ＮＨＫ内部の多様な職員の結節点としての《青年の主張》

ところで、冒頭で述べたように、《青年の主張》は、戦後昭和のＮＨＫの歴史においても、きわめて重要度の高い番組であった。紅白歌合戦と比肩しうる年に一度のイベントであった。だが、視聴率に関して言うならば、紅白歌合戦と比べるまでもなく、微々たるものに過ぎない番組であった。にもかかわらず、三〇年以上にわたって、ＮＨＫが過剰なほどの「疑似メディアイベント」を再生産し続けた理由は何か。元ＮＨＫ報道局ディレクターのメディア研究者という立ち位置の読者の私は、本書の豊富な情報から様々な想像に誘われた。

一つには、それには戦後のテレビ放送草創期の各局の覇権争いが想い起こされる。教育テレビと言えば、ＮＨＫの専売特許のようなイメージが今ではあるが、元々はそうではない。テレビ朝日の前身は、一九五七年に教育番組専門局として設立された日本教育テレビであった。日本教育テレビは教養番組を三〇％以上放送することを免許交付の条件とされた放送局だったのである。テレビ東京の前身の東京12チャンネルも、高校の授業放送をメインとして行う教育番組専門局として、一九六四年に開局した放送局であった。このように教育番組放送局が競合しあう中、公共放送ＮＨＫは教育番組の覇権を確かなものとすべく、力を入れる

必要があったのである。ＮＨＫが《青年の主張》で、皇太子夫妻など皇族や文部大臣の列席などの「国体」的な大仰な儀式性を求めたのもそうした背景があった。そして、大人の「まなざし」を活用して異世代間の「国民」を仮想的に結びつける結節点として、年に一度のこのイベント・放送を利用しようとしたと思われるのである。

それでも、昭和の終わりに近づくにつれてかつての吸引力を失いながらもイベント・放送を継続し、平成に入っても、後継番組『青春メッセージ』を立ち上げてまでもあえて引き継いだのはなぜなのだろうか。私には、このイベントが、視聴者、国民に対してではなく、じつのところ、ＮＨＫ職員らの内部事情も少なからずあったと想起させられるのである。結論から言うならば、《青年の主張》は、ＮＨＫ局内の多様な立ち位置の職員、関係者を糾合する結節点として機能していたのではないかと想像されるのである。《青年の主張》のイベント活性化のため、ＮＨＫは各種団体、企業に積極的に働きかけた。こうした仕事を行うのは、主に事業部、あるいは営業の職員であったが、これらの職員は、ＮＨＫ総体で見るならば、どちらかと言えばノンエリート的な立ち位置の人々であった。場合によっては、彼ら／彼女ら自身が一〇代後半か二〇歳くらいの時に、このイベントの出場者をめざしたとしてもおかしくなかったかもしれない人々でもある。したがって、これらの職員にとって、《青年の主張》活性化のためのコミットメントは、極めて高いインセンチブにもとづいた仕事であったと想像されるのである。

それだけではない。職員の数が一万人を超える巨大組織ＮＨＫには、激しいセクショナリズムと敵対が常に渦巻いている。加えて、図式的に単純化することが許されるならば、エリート職員（幹部局員、記者、ディレクター、アナウンサーなど）、幾重にも階層的なノンエリート（カメラマン、立場にもよるが技術職、照明、美術、メイク担当者、営業、受信料集金員、車

輌運転手ほか…）が業務上も密接かつ複雑に絡み合いながら、公共放送の番組送出に向けての仕事が成される。したがって、放送局は、同じメディアであっても出版社、新聞社以上に多様な職種と階層を抱える組織である。

《青年の主張》は、番組を直接制作した青少年教育部以上に、ひょっとしたら、事業部職員、営業・受信料集金員、車輌運転手他の立ち位置の人々にとって重要な番組ではなかっただろうか。《青年の主張》は、齟齬や不調和、時には敵対関係に陥りかねない多様な立ち位置の職員らの結節点としての役割を果たしていたのではないだろうか。本書に描かれた膨大な情報の行間からは、そうした想像をも喚起させられた。

九　本書の意義と今後

冒頭で述べたように、本書は、「一九六八年」を核とした一九六〇年代前後の〈政治の季節〉を総括する流行と、一方で「昭和三〇年代ブーム」の語りに代表されるような「明るい昭和」として当時を処理する流行にみられるように、戦後の昭和についての語りが二極化する狭間で見逃されてきた勤労青年文化のありようを生き生きと浮かび上がらせながら可視化させることに成功した点で、きわめて希少性の高い書物である。まもなく平成が終わり、新たな元号に変わろうとし、昭和がますます遠いていく昨今、そのことの意義は猶更大きく感じられる。当時を生きた世代はむろんのこと、若い世代にもぜひ広く読まれてほしい。同時期に刊行された、福間良明著『「働く青年」と教養の戦後史―「人生雑誌」と読者のゆくえ』もそうだが、当時の勤労青年文化に光をあてた書物が同時期に世に送られたことは重要だと思われる。

今後、勤労青年を磁場にした当時の文化のありようがさらに光をあてられることが期待されるが、その意味では、新興宗教の位置づけや果たした役割なども考慮すべき対象になるだろう。創価学会をはじめとする

新興宗教が戦後、大きく信者数を増やした背景には、地方から東京や大阪などの大都市に移り住んだ膨大な数の集団就職者、勤労青年の存在があった。そういう意味では、《青年の主張》の応募者や人生雑誌の読者とも属性に共通点が見られる。創価学会などの新宗教は青年の社会意識の涵養に熱心だったが、同時に現世利益の志向性が強いため、一方では、実利を忌避する人生雑誌や急進的な社会改革を唱える全共闘運動とは少なからぬ温度差も見られた。だが、これまで、それら新興宗教のありようが戦後社会の青年文化を考える上で実証的な議論の射程に十分入ってきたとは言えない。

したがって、当時の青年文化を考える場合、新宗教運動との相関のありようは少なからず重要であろう。例えば、創価学会は、学会言論部が母体となり、雑誌『第三文明』を一九六〇年代に創刊し、その名の通り「第三文明」の勃興を主張するようになるが、その創価学会の躍進と人生雑誌の衰退は時期的に重なる。また、創価学会を母体として、中道政治を目指した公明党が一九六四年に結党されるが、創価学会信者は共産党支持者と社会階層的にいくぶん重なる背景もあってか、共にライバル視して「犬猿の仲」となり、一九七〇年代に作家・松本清張が間に入って和解につとめ、（その後、分裂するものの）「創共協定」が結ばれたほどであった。

今後は、勤労青年などのアクターを軸にしつつ、若者、全共闘運動、政治に加え、新興宗教なども複雑に絡み合った当時の社会文化的構図が解き明かされていくことを願ってやまない。

《参考文献》
大井浩一『六〇年安保 メディアにあらわれたイメージ闘争』（勁草書房、二〇一〇年）
小熊英二『１９６８（上）・（下）』（新曜社、二〇〇九年）
佐藤卓己『『キング』の時代――国民大衆雑誌の公共性』（岩波書店、二〇〇二年）

佐藤卓己『言論統制――情報官・鈴木庸二と教育の国防国家』（中央公論新社、二〇〇四年）
佐藤卓己『テレビ的教養――一億総博知化への系譜』（ＮＴＴ出版、二〇〇八年）
佐藤卓己『青年の主張 まなざしのメディア史』（河出書房、二〇一七年）
佐藤優『創価学会と平和主義』（朝日新聞出版、二〇一四年）
絓秀実『１９６８年』（ちくま新書、二〇〇六年）
竹内洋『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』（中公新書、二〇〇三年）
坪内祐三『一九七二 「はじまりのおわり」と「おわりのはじまり」』（文藝春秋、二〇〇三年）
中西新太郎『若者たちに何が起こっているのか』（花伝社、二〇〇四年）
日高勝之『昭和ノスタルジアとは何か 記憶とラディカル・デモクラシーのメディア学』（世界思想社、二〇一四年）
福間良明『「働く青年」と教養の戦後史 「人生雑誌」と読者のゆくえ』（筑摩書房、二〇一七年）
毎日新聞社編『１９６８年に日本と世界で起こったこと』（毎日新聞社、二〇〇九年）
見田宗介『まなざしの地獄 尽きなく生きることの社会学』（河出書房新社、二〇〇八年）
四方田犬彦・平沢剛編著『１９６８年文化論』（毎日新聞社、二〇一〇年）
Boorstin, Daniel Joseph. 1962. The Image : What Happened to the American Dream. Atheneum. ＝星野郁美・後藤和彦訳、1964『幻影（イメジ）の時代――マスコミが製造する事実』東京創元社.